

称号及び氏名	博士（言語文化学）	中野 陽
学位授与の日付	2018年3月31日	
論文名	聞き手配慮性から見た日本語学習者の否定発話	
論文審査委員	主査	張 麟声
	副査	山東 功
	副査	西尾 純二
	副査	奥村 和子
	副査	野田 尚史（国立国語研究所）

論文要旨

1. 本稿のおもな主張と概要

本研究ではおもに以下のことを主張する。

日本語学習者は、ある程度習得の進んだ段階であっても、初対面のような社会的距離のある相手との雑談場面において相手からの質問に否定応答をしたり、相手の認識を打ち消したりする（否定発話を行う）際に、日本語母語話者よりも直接的な表現を用いる傾向がある。学習者の否定発話は、そこで使用する形式においても、談話構成要素となる配慮行動の種類においても母語話者のものとは異なっている。

本研究では学習者の否定発話を文レベルだけでなく談話レベルでも詳細に調査・考察を行った。

2. 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。

- 第1部 研究の背景・目的・先行研究
- 第1章 研究の背景・目的と研究の方法
- 第2章 否定発話に関連する先行研究の概観

第2部	否定発話の中核的部分に現れる配慮形式
第3章	日本語母語話者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式
第4章	日本語学習者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式 —日本語母語話者との比較から—
第3部	否定発話の副次的部分に現れる配慮行動
第5章	日本語母語話者による否定発話の副次的部分に現れる配慮行動
第6章	日本語学習者による否定発話の副次的部分に現れる配慮行動 —日本語母語話者との比較から—
第4部	本研究のまとめと今後の課題
第7章	本研究のまとめ
第8章	今後の課題

3. 各章の概要

第1章 研究の背景・目的と研究の方法

本研究では、対話場面において否定的な応答をしたり聞き手の予測や認識を打ち消したりするときの発話を「否定発話」と呼び、日本語学習者の否定発話が聞き手配慮性から見てどのようなものであるかを探ることを目的とする。

本研究ではまた、否定発話の談話構造を、「中核的部分」と「副次的部分」に分ける。

否定発話の「中核的部分」とは、否定発話全体のうち、否定対象となる事柄に直接言及し、対話相手への面子侵害となり得る部分を指す。「副次的部分」は否定発話全体のうち、否定対象となる事柄に間接的に言及し、対話相手の理解促進や対話相手の面子侵害の緩和が行われる部分である。

1	A	新聞は読みますか。	先行発話
2	B	<u>いや、読んでないですね。</u> ネットで十分なんで。	否定発話

分析にあたっては、中核的部分にどのような形式が用いられているのか、また副次的部分にはどのような配慮行動が現れるのかを個別に確認した。

第2章 否定発話に関連する先行研究の概観

否定発話に関連する研究として、おもに自然会話における否定応答詞の使われ方、教材での扱われ方、また母語話者と学習者による使用の相違に関する研究を概観した。

また、談話レベルにおいては否定発話に類似した言語行為である「不同意」研究から、母語話者ならびに学習者の使用する配慮行動、また、両者による配慮行動の受け止め方の相違を指摘した研究を外観した。

第3章 日本語母語話者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式

日本語母語話者の否定発話・中核部分に現れる形式を観察・分析した結果、おもに以下

(1) から (9) のような傾向があることがわかった。

- (1) 応答詞は、「使用しない」ことが「使用する」ことよりも多く、応答詞のない否定発話は述語部分を言い換えたりその前後も冗長にしたりしているものが大半である。つまり、端的に伝えるための省略ではなく、肯否を曖昧にするための不使用であることのほうが多い。
- (2) 応答詞を使用する場合は「いや」をよく使用し、「いいえ」は使用しない。
- (3) 応答詞のみの否定発話を行わない。
- (4) 「あ」「あの」「えっと」「もう」などのフィラーを活用し、否定発話を行うことへの遠慮や躊躇感、親近感などを表している。
- (5) 発話冒頭部分が聞き手発話の反復になる場合、その部分を省略することで聞き手の体面を保つことがある。
- (6) 命題の後に一部の副詞(的語句)・機能語・思考動詞や助動詞類を付加させることによって確信度を弱めたり聞き手の予測・期待の当否を予告したり、また、程度や量を限定したりする。
- (7) 対人的ムードの「の(だ)」文が持つ「告白」的ニュアンスを利用し、対話相手の認識に共感を示す。
- (8) 従属節のみで言い終わる発話に接続助詞「けど」「て」などを終助詞的に付加させて、発話に余韻を持たせる。
- (9) 文末に終助詞「ね」を付加させて聞き手と認識を共有することで聞き手との心的距離を近づける。

第4章 日本語学習者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式

—日本語母語話者との比較から—

学習者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式を母語話者のものと比較した結果、(10) から (18) のことがわかった。

- (10) 学習者は否定発話の際、フィラーの使用は非常に少ない。使用されたフィラーの中では「あ」や「え」などが中心で、母語話者が使うような「えっと」や「あの」は用いない。しかし、否定発話ではない環境では使用することもある。
- (11) 母語話者は雑談場面において否定応答詞「いいえ」をまったく使用しないが、学習者はある程度使用する。
- (12) 母語話者による、否定応答詞を伴わない否定応答は、真偽を決め難い命題であ

る場合や、否定ニュアンスを弱化させたものが多いのに対し、学習者は一語で済ませるような手軽な応答である場合が多い。否定応答詞の使用を避ける動機が、母語話者と学習者で異なることが示唆される。

- (13) 母語話者が否定応答をする際は対話相手の先行発話内に含まれる形式を省略した形式を用いることがあるが、学習者は省略を行わず、直接、対話相手の発話形式をほぼ変えずに引用して否定する。
- (14) 母語話者は否定ニュアンスを緩和するため、多様な副詞や部分否定表現を使っているが、学習者の否定発話に使われる形式はバリエーションに乏しく、使用頻度も低い。
- (15) 母語話者は否定発話の中核的部分の文末において確信度を弱める機能を持つ動詞や助動詞類（「思う」「…かもしれない」「らしい」「みたい」など）を使って表現を緩和することがあるが、学習者が使用する形式は「思う」のみである。
- (16) 母語話者は否定発話の際、「の（だ）」文の持つ「告白的」なニュアンスを積極的に活用しているが、学習者の使用はわずかである。他の環境では一定程度の使用が見られることから、「の（だ）」が持つ緩和機能を理解していない可能性がある。
- (17) 母語話者は接続助詞の終助詞的用法をほとんど使わない。母語話者は「けど」がもっとも多かったが学習者はあまり使用していない
- (18) 学習者は終助詞「ね」のうち、任意要素としての「ね」を使うことが少ない。

第5章 日本語母語話者による否定発話の副次的部分に現れる配慮行動

日本語母語話者による否定発話の副次的部分を構成する配慮行動と、それを含めた否定発話全体の談話展開を調べた結果、おもに以下のことがわかった。

まず、調査の結果、母語話者による否定発話の副次的部分を構成要素には、8種の配慮行動に分けられ、さらにそれらは、「効果的な伝達を指向するもの」と、「対話相手の体面保持を指向するもの」の2種類に大別することができた。また、それらの出現数では、「効果的な伝達を指向する」配慮行動である、「否定の理由を述べる」「詳細内容を伝える」の2つの配慮行動がもっとも多いが、「対話相手の体面保持を指向するもの」も全体の3割程度見られた。後者のうち一部は同じ非優先的応答である「断り発話」や「不同意発話」に現れると指摘されているストラテジーと共通するものも見られた。

また、否定発話全体の談話展開は、中核的部分を先行させる型が中心であったが、中には効率の面では望ましくないと思えるような、副次的部分が先行するパターンや、中核的部分の前後ともに配慮行動が見られるもの、配慮行動が中核的部分に挟まれるような談話展開なども見られた。母語話者は、雑談の際には必ずしも伝達効率を優先せず、対話相手の体面保持にも留意しながら話を進める場合もあることがわかった。

第6章 日本語学習者による否定発話の副次的部分に現れる配慮行動
—日本語母語話者との比較から—

学習者による否定発話の副次的部分には、「否定対象となる事柄について意見や感想を述べて対話相手に親しみを表す」、「対話相手の認識に共感を示す」といった、対話相手の体面保持を指向する配慮行動が母語話者よりも少なく、「否定の理由を述べる」「詳細情報を述べる」のような、効果的な伝達を指向する配慮行動が母語話者よりも多い。(表1参照)。

表1 指向性から分類した配慮行動の割合・母語別比較

	日本語母語話者	日本語学習者
伝達	▽ 221** (69.3%)	△ 75** (88.2%)
体面	△ 98 ** (30.7%)	▽ 10** (11.8%)

** $p < .01$, △有意に多い, ▽有意に少ない

また、否定発話の談話展開は中核的部分を先行させるパターンが圧倒的に多く、ここから学習者は雑談の際に、対話相手の体面について母語話者ほどには留意していないことが示唆された。

第7章 本研究のまとめ
第8章 今後の課題

本研究では、『BTSJ コーパス』の分析から、否定発話における配慮形式、配慮行動について、母語話者との比較から学習者の特徴を明らかにした。

しかし、データ数は決して多いとは言えず、統計的優位性を示せない項目もあった。今後、新たなデータ採取も行い、今回得た知見をさらに強化する必要があるだろう。

また、随所で日本語教材の影響についてその可能性に触れたが、これも実際に教材分析を行った上で、それぞれの形式がどのように取り上げられ、あるいは取り上げられていないのかを観察して問題提起の根拠としたい。

さらに、学習者の母語環境における否定発話の観察や、学習者の「配慮」に対する意識の調査も行い、否定発話研究を深化・発展させたい。

学位論文審査結果の要旨

1 この論文の学術的意義

敬語の使用が敬意表現の使用に変わりつつある流れに相まって、阪田雪子、新屋映子、守屋三千代(2003)『日本語運用文法』において「配慮表現」という言い方が初めて使われ、続いて、山岡政紀、牧原功、小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』や野田尚史、高山善行、小林隆編(2014)『日本語の配慮表現の多様性』など、配慮表現に関する研究がいくつか刊行されはじめてはいるものの、配慮表現に関する研究全般はいまだに始動の段階にあると言える。そんな中、この学位申請論文は、日本語母語話者及び日本語学習者の「否定発話」を記述して比較研究し、それぞれの特徴を明らかにしている。日本語学的な研究としても、第二言語習得的な研究としても、高い評価に値する。

2 この論文の諸側面に関する具体的な評価

この論文は、テーマの選定、研究の方法、先行研究の取り扱い、論述の展開、研究の結果のそれぞれの項目について、次のように評価できる。

テーマの選定：

研究の最前線の動向をしっかりとらえたうえで、聞き手への配慮が不十分に陥りやすい「否定発話」を研究対象とし、意欲的努力ぶりを示している。

研究の方法：

研究の方法としては、母語話者の言語使用と学習者の言語使用を比較して、学習者の中間言語のあり方を記述するという第二言語習得分野の基本的な研究手法を用い、言語データに関しては、公開されている宇佐美まゆみ監修(2011)『BTSJ による日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011 年度版』など使用している。誰でも検証調査を行うことができる科学的な手続きが取られている。

先行研究の取り扱い：

新しい研究分野であるだけに、本格的な先行研究が少ない中、関係のありそうなものを徹底的に調べて、参照している。

論述の展開：

以下のように、本論文は4部8章からなっている。展開が論理的で、構成が適切である。

第1部	研究の背景・目的・先行研究
第1章	研究の背景・目的と研究の方法
第2章	否定発話に関連する先行研究の概観
第2部	否定発話の中核的部分に現れる配慮形式
第3章	日本語母語話者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式
第4章	日本語学習者による否定発話の中核的部分に現れる配慮形式
第3部	否定発話の副次的部分に現れる配慮行動
第5章	日本語母語話者による否定発話の副次的部分に現れる配慮行動
第6章	日本語学習者による否定発話の副次的部分に現れる配慮行動
第4部	本研究のまとめと今後の課題
第7章	本研究のまとめ
第8章	今後の課題 研究の結果：

研究の結果：

日本語母語話者と学習者の否定発話の実態を記述し、特に学習者の傾向について次のような結論を出している。

- ・否定発話の中核的部分に配慮形式を用いる頻度は母語話者にくらべて低く、バリエーションも乏しい。応答詞「いいえ」や、否定対象となる対話相手の発話の直接引用など、母語話者より否定ニュアンスの強い表現を用いることが見られる。
- ・否定発話の副次的部分に見られる配慮行動は、効果的な伝達を指向する性質のものが大半で、対話相手の体面保持を指向する性質のものは非常に少ない。

3 審査委員会の結論

本審査委員会は、全員一致で、この論文が以下の本研究科の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると判断する。

- 1) 研究テーマが絞られている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。